開国外交に活躍した人々と万次郎　その２

―　（附）万次郎の晩年の謎についての一考察　―

塚本　　宏

Ⅲ　開国外交に活躍した男たちの群像

これからは、阿部正弘の指導に応えて、開国外交の第一線で活躍した個々の人物を取り上げることにしよう。その選別は、筆者が恣意的に決めたもので、特段の他意はなく順不同ではあるが、ほぼ年齢順とした。

（1） 林大学頭復斎（１８０１－１８５９）

いよいよ、ペリー提督率いるアメリカ艦隊の２回目の来航が予想よりも早く、嘉永６（１８５４）年２月８日浦賀沖に到着する。日米和親条約の締結に至る本番の外交交渉が始まることになる。その主役を果たす常設の「アメリカ応接掛の筆頭（首席）」に阿部から任命されたのが、ご存じ林家第１１代・復斎であった。昌平黌の総教（塾頭）であることは勿論だが、林家は歴代、朝鮮通信使（前後１２回来日している）の応接を担当しただけでなく、オランダ商館長から長崎奉行経由で幕府へ提供された海外情報（一連の「和蘭風説書」など）は逐一読み解き、オランダ国王あての返書も作成するなど、言わば外交を専門とする家系であったことも注目してよい。

したがって、英国と清国のアヘン戦争の結末はもとより両国間の「天津条約」も細部にわたって熟知していたし、当時のアジアをめぐる世界情勢を凡そ理解していたのである。

さて、両国の代表、ペリーと復斎との直接交渉における両者の応酬の場面は、加藤祐三の手により、日本側の記録である復斎の「墨夷応接録」とペリー側の資料「海軍長官への公的報告」（ペリー・ノート）、つまり共に「一次資料」を突合せるよって、あたかもその場に居合わせたかのごとく見事に再現されている[17)]。

筆者は、最初講演をお聞きし、さらに贈呈頂いた著書を一読して、外交下手な日本人という先入観が一気に吹き飛ばされるほどの感動を覚えたのである。つまり、復斎は日本語とオランダ語通訳、ペリーは英語とオランダ語、中国語通訳を巧みに使いまわし、条約案も漢字、英語、オランダ語で作成されたが、復斎は、当時の諸外国の動静を十分理解しており、相手の弱点（専門の外交官は乗船しておらず（元来、海軍軍人である）、補給路なしで長期滞留は不可能など）を知悉した上で一歩も引き下がらず見事な交渉術を駆使して見せたのである。このような綿密な資料分析で、「幕府無能無策説・アメリカ軍事圧力説・極端な不平等条約説という三段論法」が歴史の実像と大きくかけ離れていることが明らかされた意義は大きい。

すなわち、鎖国体制の現状維持は困難と考えて、異国船への薪水食料などの提供はやむ無しと判断したが、通商要求については断固として拒絶した。まさに外交交渉のお手本とも言うべきであり、このような先人を持ったことは我々日本人の誇りであろう。

かくして、下田追加条約の締結により、復斎は開国の大任を全うしたのである。さらに彼は、永禄から文政に至る約２６０年間の対外関係史料を国別・年代別に配列した史料集「通航一覧」（全

３５０巻）を編纂した功績で賞賜されている。

その後は平穏な生活を送り、安政６（１８５９）年に江戸・牛込で死去、享年５９歳。

なお、後述の優秀な外交官、岩瀬忠震と堀利熙は、それぞれ彼の二人の妹の子息、つまり復斎の甥に当たり、一方、幕末の妖怪と恐れられた鳥居耀三は復斎の長兄だったので、歴史の皮肉を感じずにいられない[18)]。

（２）川路聖謨（１８０１－１８６８）

川路聖謨（としあきら）は、豊後日田の代官所属吏であった内藤吉兵衛歳由の長男（幼名・弥吉）として生まれ、父が江戸に出て御家人株を入手し幕府徒歩組に編入されたのち、１２歳で小普請組の川路家の養子となるという出自からもわかるように、下級武士からスタートした。超人的な刻苦勉励の努力家であった。文化１４（１８１７）年に勘定奉行所の「筆算吟味」試験に合格して出世の切っ掛けをつかみ、翌年、勘定奉行所支配勘定を経て御勘定に昇進し旗本になった。その後、寺社奉行所へ出向、勘定吟味役に昇格、さらに佐渡奉行を経て、老中水野忠邦時代の小普請奉行、普請奉行を歴任して改革に参与する（この頃から名を聖謨と改めた）。

勘定吟味役の職務の関係で当時の西洋諸国の動向にもに関心を持つようになり、西洋事情通になったという。

水野忠邦の天保の改革が挫折した後、奈良奉行に左遷されるが民政に尽くし、植林事業や博奕の取締まり、貧民救済にも取り組み名奉行と慕われた。次いで大阪東町奉行を経て、嘉永５（１８５２）年に公事勘定奉行に就任、家禄５百石に加増された。

翌嘉永６（１８５３）年、阿部正弘の抜擢により海防掛に任命され、黒船来航に際して開国派の一角を担って大いに活躍する。とくに彼は同年、長崎に来航したロシア使節・プチャーチンとの交渉に際して露使応接掛を、筒井政憲、村垣範正、伊沢政義らとともに担当し、安政元（１８５４）年、下田で日露和親条約の調印に成功する。忘れてならないのは、現にわが国が主張している「北方四島領有」の主要な根拠こそ、この日露和親条約（第９条）であり、その交渉をまとめる主役を務めたのが川路聖謨であった。

日露交渉の際、ロシア側も聖謨の人柄に魅せられ、プチャーチンの秘書として随行していたゴンチャロフは、「川路を私達はみな気に入っていた。……川路は非常に聡明であった。彼は私達を反駁する巧妙な弁論をもって知性を閃かせたものの、それでもこの人を尊敬しないわけにはゆかなかった。彼の一言一句、一瞥、その物腰までがすべて良識と機知と炯眼と練達を顕していた。明知はどこへ行っても同じである」とべた褒めしている。

プチャーチンも帰国後に「日本の川路という官僚は、ヨーロッパでも珍しいほどのウイットと知性を備えた人物であった」と書いている。前述の林復斎と共に、誠に外交官のお手本の名を辱めない人物だと尊敬したい。

その聖謨も安政６（１８５９）年、将軍継嗣問題（彼は一橋派であった）で、時の大老井伊直弼の忌避に遭い閑職（西丸留守居役）に左遷され、その翌年にはその役も罷免され隠居差控を命じられた。

慶応２（１８６６）年には中風による半身不随の身となり、実弟・井上清直（後述）の自殺なども重なり不幸続きとなった。慶応４（１８６８）年３月７日、「官軍」の江戸に迫る足音を聞きつつ、自らを「頑民斎」と名乗ったが、１４日、西郷と勝との間で江戸城無血開城の約成る前日、自決した。左手が利かず右手だけで作法通り割腹しピストルで喉を撃った。日本での「拳銃自殺第１号」と言われる[20]。

山田風太郎は彼の死を惜しんで、「彼は要職を歴任したとはいうものの、べつに閣老に列したわけでもなく、かつ生涯柔軟諧謔の性格を失わなかったのに、見事に幕府と武士道に殉じたのである。徳川武士の最後の花ともいうべき凄絶な死に方であった」という言葉を贈った[21]。

終わりに、万次郎との関連で蛇足ながら一言。万次郎は、勘定奉行時代の川路聖謨とは親しい間柄であったが、捕鯨事業が国益に利するだけでなく、大型船の船員養成の一助になるという持論を進言していた。聖謨もその趣旨に賛同し、まずは万次郎を函館奉行の手附（捕鯨御用中は与力次席）として派遣しながら、結果的に受け入れ態勢の不備など紆余曲折[21]があり万次郎の函館での捕鯨は成功しなかった。

（３） 水野忠徳（１８１０－１７６８）

ここから述べる水野忠徳、永井尚志、井上清直、堀利熙、岩瀬忠震の５人の男たちは、いずれも「海防掛」出身であり、言わば阿部正弘の子飼いの俊秀揃いである。米露英仏の欧米列強との開国に目途のついた安政５（１８５８）年７月、わが国で最初の外交官僚専門職というべき「外国奉行」に任命された人たちであった[22]。

まず、水野忠徳から見て行くとしよう。

忠徳は、文化７（１８１０）年、諏訪頼篤の次男として江戸で生まれ、１２歳で水野忠長（高３００俵）の養嗣子となり、２８歳で昌平黌大試に及第し、「学問出精」のせいで天保１５（１８４４）年、西丸目付に取立られ評判になったという。以後、阿部正弘に認められて、先手鉄砲頭、火付盗賊改、浦賀奉行と順調に昇進を重ねて嘉永６（１８５３）年に長崎奉行に任じられた。

長崎では、オランダ商館長・クルシウスと直接対談して、クルシウスが幕府に提供した海外情報、とくにペリー来航の見通しが正確なことを確認している。また、この時期長崎に来航中のオランダ軍艦スンピン号の艦長・ファビウス中佐から「幕府海軍創設」について貴重な意見を入手することが出来た[23]。その詳細は割愛するが、将来の軍艦は鉄製で蒸気機関によるスクリュー式を推奨し、士官から水兵など乗組員の教育のため学校の必要性を説き、そのためにも日蘭の条約締結が必須であることを強調している。忠徳はこれを纏めて直ちに阿部に報告し、オランダへ軍艦の発注（のちの咸臨丸と朝陽丸）、オランダ海軍の教師団を招いての「長崎海軍伝習所」設立が決定されたのである。

このように、幕府中枢とオランダ商館・海軍との仲介役として抜群の働きをした忠徳を、阿部が見過ごすわけがなく、外交官として川路聖謨の後継者に抜擢登用して行くのは当然の成行きであったろう。

忠徳は安政元（１８５４）年、日英和親条約の締結後、勘定奉行兼勝手掛，その後、田安家家老

職を経て、いよいよ冒頭に述べた「外国奉行」に就任して（安政５（１８５８）年)、日英、日仏二つの「修好通商条約」に全権委員として調印した。また、安政二朱銀の発行を献策（貨幣に関する有数の理論家でもあった）して金銀の内外価格差による金貨の流出を防ごうとしたが、諸外国からの猛反対に遭い挫折せざるを得なかった。

翌安政６（１８５９）年には神奈川奉行も兼任するが、不幸にもロシア・海軍士官殺害事件の責任を問われて西丸留守居役に左遷される。この結果、日米修好通商条約批准のための「万延元年遣米使節団」のメンバーには加えられなかった。しかし、遣米使節の護衛を名目に随伴艦として「咸臨丸」を派遣することを決定している。

文久元（１８６１）年には外国奉行に再任して外交官僚に復帰、同年１２月に、幕府の命で「小笠原開拓御用」に、因縁の「咸臨丸」（船長・小野友五郎）で小笠原へ強い使命感をもって出発。われらが万次郎も通訳として乗船、その節には、恩人の大槻磐渓から餞の七言絶句（漢詩）を贈られている。小笠原諸島の検分はもとより、父島在住のセイヴァリーら欧米系島民に対してこの地が日本領であることを確認させた功績は大きい（その詳細は、当協会員・田中弘之（元・駒澤大学図書館副館長）の著書・講演（ａ）や幅泰治・前事務局長の報告（ｂ）[24]をご参照下さい)。

いよいよ幕末の風雲急を告げる時を迎え、忠徳の身辺も慌ただしくなり、文久２（１８６２）年には「公武合体」に反対して箱館奉行に左遷され、すぐ辞任、翌年には１４代将軍家茂奪還のため幕府陸軍を率い大坂へ向かうも問題解決に至らず、謹慎を命じられた。

慶応４（１８６８）年１月の鳥羽伏見の戦い後、新政府軍に対する徹底抗戦を主張したが、第１５代将軍慶喜に容れられず隠居する。間もなく病に倒れ就床中、深夜突如起き上がり「今出仕の命が参った。直ぐに登城の支度をせよ」と叫んで絶命した。慶応４（１８６８）年７月９日のことで、何とも壮絶な「憤死」（あるいは狂死）であった。享年５８歳。

（４） 永井尚志（１８１６－１８９１）

永井尚志（なおゆき）は、三河・奥殿藩主の子として江戸で生まれ、２５歳ころ２千石の旗本・永井尚徳の養子となった。１８４８年に昌平黌、大試に合格し、一時、甲府徽典館・学頭を務めた後、嘉永６（１８５３）年に海防掛目付に抜擢された。翌年には長崎駐在を命じられ、前述の水野忠徳が企画準備した「長崎海軍伝習所」の総取締として具体的な設立に尽力し、勝海舟、小野友五郎、榎本武揚、ほか数十人の教育にあたった。また長崎製鉄所の創設にも着手するなどの活躍をした。

その功績を認められ、安政４（１８５７）年に江戸へ戻り、勘定奉行勝手掛（江戸詰で長崎御用を兼帯）を経て、翌年、水野ら４人とともに外国奉行に就任し、ロシア、イギリス、フランスとの交渉を担当し通商条約調印を行った。その後、軍艦奉行に異動したものの、将軍後継者争いで、一橋派に組したため井伊大老（南紀派）によって罷免され、失脚する。

大老の暗殺後の文久２（１８６２）年、京都町奉行として復帰、京都において公武合体派のクーデタ（八月十八日の政変）や元治元（１８６７）年の禁門の変では幕府側の使者として朝廷折衝など交渉能力で手腕を発揮した。慶応３（１８６７）年には、旗本としては異例の若年寄までの昇進を遂げた。

鳥羽・伏見の戦い後、第１５代慶喜に従って江戸へ帰還、大政奉還に伴い、徳川家の駿府転封が

決まると榎本武揚と行動を共にして、蝦夷地へ渡り「蝦夷共和国」の函館奉行に就任した。しかし、旧幕府軍は約半年の戦争に敗れ、明治２（１８６９）年５月に降伏した。榎本と共に東京へ監送され、二人は死を覚悟したが、「官軍」の黒田清隆の計らいで罪を許された。

明治５（１８７２）年、永井は明治新政府に出仕し、開拓使御用係、左院小議官を経て、明治８（１８７５）年には元老院権大書記に任じられる。

退官後の晩年、永井は、親友だった岩瀬忠震（後述）の旧宅「岐雲園」に住まいを移し、園内に祠を建て終生、香華を絶やさなかった。松岡英夫はその著書で、このことを「友情の極み」というべきであると評している。土居良三もまた、「相手の地位や禄高、年齢の上下によって態度を変えることなく、知りたいことは誰にも聞き、良い意見があれば用いる。封建的身分制度の厳しい中に、よくこんな人物が生きられたと思うくらいだ」と記している。

明治２４（１８９１）年７月、大往生し、享年７５歳。

なお、永井尚志は慶喜の大政奉還時、その奏上文を起草した人物としても有名であり漢詩の才も抜群であったが、昭和の著名な作家・三島由紀夫（本名・平岡公威）の養高祖父に当たることも付言しておこう[25]。

（5） 岩瀬忠震（１８１８－１８６１）

「最初の外国奉行」5人中、阿部正弘がもっとも信頼して手許から離さなかったし、阿部が後継の老中首座を託した堀田正睦もまたブレーンとして活用することになったのが、岩瀬忠震（ただなり）であった。安政5（１８５８）年6月から9月にかけてわが国の開国・通商を一身に引き受け、これぞ男児の事業と言わんばかり腹の座った交渉を重ね、日米、日蘭、日露、日英、日仏、5つの「修好通商条約」すべての交渉、調印に立ち会ったのが、5人中、岩瀬唯一人だったことがその証拠だとも言えよう。また、母方の伯父・林復斎と、甥の岩瀬忠震とが、それぞれ「和親条約」と「修好通商条約」を纏め上げるのに活躍したというのも奇縁と言うほかない。

ここでざっと、岩瀬の経歴を辿ってみよう。

忠震は、旗本・設楽貞丈の三男として、江戸で生まれ（母が林述斎の娘）、天保１１（１８４０）年、岩瀬家（禄高８００石）の婿養子となり家督を継いだ。２５歳で昌平黌大試を優秀な成績で合格、嘉永２（１８４９）年に西丸小姓組に召し出され、同年、甲府徽典館‣学頭、続いて昌平黌・教授となる（勿論、秀才であったが恐らく林家の引立てもあったろう）。ここまでは外交とは無縁の「儒学者」の道を歩んでいたが、嘉永７（１８５４）年に至り、阿部正弘にその才能を認められて、講武所、蕃書調所、長崎海軍伝習所の開設、軍艦と品川砲台の建造にも尽力し、次第に外交の道を目指すことになる。

先の日米和親条約での取決めに基づきタウンゼント・ハリスが下田へ来航し（安政３（１８５６）年7月）、いよいよ岩瀬は下田出張を命じられ、当時、下田奉行であった井上清直（後述）とともにハリスとの外交交渉を開始することになる。ここで、偶然にも先述した水野忠徳や永井尚志、さらに函館奉行・堀利熙（後述）らいずれも岩瀬の同志（開明派・積極開国派である）と昵懇の仲で意見交換していたオランダ軍艦の艦長・ファビウスが、長崎から函館経由で下田へ入港して来るという幸運に恵まれた。僅か二日間であったが、岩瀬は、率直に色々な質

問をして国際貿易の慣行などの知識を得た。これが彼の次なる転換点で、急速に「自由貿易主義者」へと変貌を遂げる[26]、しかも彼の明晰さと決断の速さはまさに天才としか言いようがない。

さて、ハリスとの条約交渉の詳細は割愛せざるを得ないが、まず岩瀬の立ち位置が幕府の枠に収まるのではなく日本国全域の政治的基盤を重視しており、同時に相手の言いなりなってはいない。例えば大坂開港を拒絶し横浜開港を主張して譲らなかったし（そのため岩瀬は横浜港の恩人と評価される）、阿片の輸入禁止や宗教論争の禁止なども盛り込まれた。交渉相手のハリスが決して清廉潔白ではなく、通貨の交換比率に乗じて私欲を肥やした欲の強い人物であったと評す向きのあることも否定できないが、岩瀬らの真摯な姿勢、自由貿易に関する熱意に押され、かなり良心的な対応を見せたことも事実であろう。ハリスは、後日、次のような証言まで述べ、「…彼らの議論のために自分の草案はしばしば真っ黒になるまで添削、改変され、その主意まで改正したことがある。このような全権委員を持ったのは日本の幸福である」と岩瀬らを評価しているという。

明治政府になってから、「関税自主権」と「領事裁判権」の２点を取り上げ、「不平等条約」であったとヒステリックに指摘されたが、結果は、わが国は自由貿易開始早々から貿易黒字を計上したし、治外法権についても当事者はさほど重要視せず、むしろ外国人を「白洲」に引き出して裁くと言うイメージに違和感を抱いていたという[27]。

次の勅許問題では、外交手腕に優れ、頭脳明晰で論理的思考の岩瀬も、「策士、策に溺れる」の類で、外交情報はおろか外交経験ゼロの朝廷に対して理路整然と説明できるものと読み誤ったのである。勿論、上司の堀田も同類であった。万世一系の朝廷は「神がかり」で有難いには違いないが、格式ばった古色蒼然たる「非論理的集団」には岩瀬の論理的な弁舌が通用する訳がない。迷走を続けた挙句、「衆議が出揃った上でなお、決し難い時は、伊勢神宮のおみくじを引いて戦か和平かを決する」[28]と言うのでは如何とも難い、要するに朝廷は結論を出すことが出来ず、勅許折衝は失敗に終わった。

堀田らが江戸に戻った直後の安政５（１８５８）年４月、井伊直弼が大老に任じられ、通商条約問題と「将軍後継問題」が絡み合ったまま、岩瀬と井上は、同年６月、神奈川沖のポーハタン号の船上で、ハリスと「日米修好通商条約」を実質的に独断で調印するに至る。元々慎重派で確固たる信念もなく、勅許なしの調印には反対であった井伊大老が、幕府外交の流れは保持し「責任は自分がとる」ことになるとは理解に苦しむところだが、一面、如何にも武家の統領らしい実践力と責任感の持ち主でもあったのも事実である。

しかし岩瀬にとって不幸なことは、上司と完全に意見を異にしており、安政５（１８５８）年９月、作事奉行に左遷されてしまう。さらに翌６年８月には作事奉行も罷免され、その禄も召し上げられた上、永蟄居を命じられる。「安政の大獄」の中で幕府有司に対する最も厳しい処分を受けた。

彼は、隅田川のほとり、岐雲荘と名付ける家に引き篭り、自分は「最早今世に用なき者」と覚悟し。「書中の先哲と堤上の花月を友と」して過ごす。

文久元（１８６１）年７月、失意のうちに病死、享年４４歳。死因は明らかではないが、蟄居生活の憂憤だとする説が有力で、岩瀬のような人物にとって、このような生活そのものが死を招くに十分な処罰に値したのであろう。また井伊大老の暗殺後の安藤信正老中が岩瀬の再起用を考えていたとしても、これに応じるだけの気力・体力は既になかったというのが事実ではなかろうか。

注

１７）加藤祐三『幕末外交と開国』（講談社学術文庫）、１６２－１８３頁、（講談社、２０１２年）

１８）前掲１）上、「系図１９　林大学頭一族」、３９６－３９７頁

１９）前掲５）と８）を参照して要約

２０）山田風太郎『人間臨終図鑑』、下、３９－４０頁、（徳間書店、１９８７年）

２１）前掲１１）、２５１－２５８頁

２２）これら５人については、前掲５）と、それぞれについて詳細な評伝が書かれている土居良三『幕末　五人の外国奉行　開国を実現させた武士』、（中央公論社、１９９７年）から引用し要約

２３）前掲１５）４５－５２頁

２４）ａ田中弘之『幕末の小笠原　欧米の捕鯨船で栄えた緑の島』（中公新書）、（中央公論社、１９９７年）、ｂ幅泰治「小笠原小史と万次郎」、「２０１８（平成３０）年度・研究報告，第９集」、５４－６２頁、（中浜万次郎国際協会）

２５）Wikipedia（永井尚志）による

２６）前掲２）、１２７－１２９頁

２７）同上、１３４－１３６頁

２８）同上、１５４頁